

ドイツ首相アンゲラ・メルケルの思想と行動

— 日本における理解の仕方 —

金 井 守

田園調布学園大学人間福祉学部

Thought and action of German prime minister Angela Merkel

— How to understand her on Japan —

Kanai Mamoru

Den-en Chofu University

要旨：難民問題を始め全世界的に人権と平和の問題が今ほど注視されている時はない。特に、東アジアに生を受けた人間として、東アジア諸国民の人権問題と国家間の平和構築の問題に関心を持たざるを得ない。人権と平和の問題は、ある意味統合の問題と考えることができる。この統合の問題にアプローチするため、今やEU（ヨーロッパ連合）の盟主となったドイツの首相であり欧州の女帝とも評されるアンゲラ・メルケルの思想と行動を研究対象とする。方法として日本におけるメルケル理解のあり方に着目する。現役の首相で特定の個人を研究対象とする点について、研究上のリスクを伴うが、人権と平和に関わる統合の問題についてそれを実践する人の内側から理解したいとの願いによる。本研究では、その糸口として、限られた文献やニュース等から日本においてメルケルがどのように紹介され理解されているかの状況把握を試みた。合わせて、日本におけるメルケル理解についての幾つかの課題を提示した。

キーワード：人権と平和、ヨーロッパ統合、ドイツ、アンゲラ・メルケル、メルケル理解

I 第1章 はじめに

1. 研究の動機

研究の動機は、東アジア諸国間の関係や各国の国民感情の問題に対する危惧と人権擁護を基礎とした平和の構築を願う立場からである。どうすれば人権が守られ、人権擁護を基礎とした諸国間の平和を構築することが可能かを探りたいとの思いである。この問題にアプローチするため、「統合」について考える必要があることがわかってきた。そのため、統合の成果を示してきたEUを取り上げ、EUのリーダーであるアンゲラ・メルケル（以下、「メルケル」と称する。）に焦点を当てることとした。

2. 研究の目的

研究の最終目標は、東アジアの人権を基礎とした平和構築の思想の探求及び実践であるが、具体的には、EUにおける統合の状況を理解し、人権と平和の構築に資する思想や要因を探ることを主眼とする。このため、本研究では、ドイツ首相でEUのリーダーであるメルケルに着目し、まずはメルケルの思想と行動の理解を目的とする。合わせて、日本におけるメルケル理解の課題を提示する。

3. 研究の方法

日本におけるメルケル理解の状況を把握するため、先行研究の状況、著作物、メディア報道の状況

を調査し、日本におけるメルケル理解の特徴を探る。その上で、日本におけるメルケル理解の課題について検討し考察する。

II 第2章 研究結果

理解を得やすくするため、本研究末尾にアングラ・メルケルの年表を付けた。

1. 先行研究の状況

CiNii 掲載論文を検索した。

(1) 「Angela Merkel」で9件ヒットした。¹⁾

〈内訳〉

翻訳5件(議会予算説明演説3件、「ヨーロッパの魂」「ヨーロッパの価値」講演各1件)、大学紀要1件(福祉国家)、学会年報1件(イギリスに関し)、レポート1件(クリーンエネルギー)、雑誌1件(メルケルの実像)

(2) 「アンゲラ・メルケル」で16件ヒットした(内、「Angela Merkel」との重複が3件あった)。²⁾ なお、検索にあたり、「メルケル」を使用しなかった。「メルケル細胞」が混入するためである。

〈内訳〉

翻訳5件(労働組合講演、議会予算説明演説)、大学紀要2件(政党分布)、書誌1件(世界を動かす10人 池上彰)、行政雑誌1件(メルケルの観察眼と決断力 熊谷徹)、レポート1件(メルケルの光と影)、雑誌4件(慎重派メルケル、ユーロ再生、経済、地球を救う50人)、研究誌1件(女性)、ニュース1件(ボッシュ CEO インタビュー)

(3) この中で、記者の意図が明示されている論文として以下を紹介する。

上野喬翻訳(メルケル演説):「ヨーロッパの魂は寛容です」ドイツ連邦共和国首相アンジェラ・メルケルのヨーロッパ議会での演説—2007年1月17日於シュトラスブルグ、東洋大学経営論集第71号 pp287-303。

記者の本訳文を日本に紹介する趣旨は、以下の通りである。

本演説は、EU 議長国議長としてメルケルが把握した EU の過去・現在・未来像が述べられ、それは同時に EU の活動方針でもあり、この内容は、他演説でもうまく取り上げられ、たゆまず繰り返され

る。本演説は、「総体的世界の中のヨーロッパの価値」の基本理念を展開しており、本学部(東洋大学経営学部)学生諸君に紹介するのにふさわしい名演説・名文と考え訳出した、としている。

訳者は、本演説が、日本人がメルケルと EU を正しく理解するのに適切な演説だと考えていることを伺わせるコメントである。内容は、タイトルにあるように、ヨーロッパの統合の思想の要点が「寛容」、「自由を基礎にした多様性の交流」にあることを、歴史的、思想的、政治的等多面的に渡り述べている。

2. メルケル首相来日講演及び質疑に見る参加者の反応

メルケル首相が2015年3月9日に公式訪問で来日した時、一般向け講演及び質疑が行われた。³⁾ 講演の概要は、日独交流の歴史から始め、ドイツの歴史を振り返り、ナチスの蛮行と戦後の和解に言及した。ウクライナ問題、テロとの戦い、社会保障、女性問題、経済問題等を取り上げた。質疑では、

- ① 東アジアの現状をどう考えるかという質問に対して、戦後ドイツが国際社会に受け入れられた理由(歴史に向き合ったこと、独仏和解)を述べた。また、アジア地域の国境問題の解決の努力の必要性に言及。
- ② 脱原発の決定に関する質問に対して、福島原発事故から学び政治的に決断したと述べ、関連して、女性政治家として最初疑念を持たれたが、女性でもうまくいくとわかると当たり前になる、前例をつくるのが大事と述べた。
- ③ 経済や教育の格差が過激派につながる懸念がある中でのドイツ政府の対応を問う質問に対して、ドイツは移民を受け入れ、移民への教育等社会的統合にも努めてきた。現在難民問題が最大の課題であるが、国民の間に難民受け入れに肯定的な姿勢も出てきていると述べた。
- ④ 言論の自由が政府にとってどのような脅威になるかという質問に対して、言論の自由は脅威ではなく民主主義社会では当然認められると述べ、また、メルケルが育った東ドイツで自由に意見が言えない政治体制の中では革新的なことは生まれず、社会が停滞し、最終的には競争力がなくなり、人々の生活保障ができなくなると

述べた。

メルケルは、日独の共通改題と連携を基調にして語っている。日本に対する注文をせずドイツの状況を語ることによって日本に示唆を与えようとしたと考えられる。一方、質問から見える日本人の関心事は、歴史認識と近隣諸国との協調、原発問題、移民・難民問題、格差問題などであり、日本が抱える課題とも密接に関連していると考えられる。

3. 投書及び女性政治家の反応

1) 投書にみる国民の反応

最近の朝日新聞の投書記事における日本人の反応を見る。

- ① 「メルケル首相の思い受け止めて」日本が脱原発を推進すべきと主張している。⁴⁾
- ② 「歴史認識、独首相の痛烈な指摘」メルケル首相の来日時の言葉を日本の歴史認識の痛烈な指摘と受け止めるべきである。⁵⁾
- ③ 「和解の前提、歴史認識の深さ」ナチスドイツの過去の総括は和解の前提であり、日中双方はアジア全体の安定平和のため貢献してほしい。⁶⁾
- ④ 「若い世代 等身大のドイツ、確かめたい」難民受入れ等に関し、ドイツ国民が実際にどのように考えているのか、現地に出かけこの目で確かめたい。⁷⁾
- ⑤ 「この人に期待 メルケル首相は世界の指導者に」メルケル首相の難民支援の決断に感動した。どの国もメルケル首相を見習うべきである。⁸⁾

この投書からみえることは、日本の歴史認識と近隣諸国との和解、脱原発、難民受入れへの関心と実現への願いである。

2) 日本の女性政治家のメルケル評価

(1) 小池百合子都知事

シリーズ「日本のメルケルを探せ」というテーマのインタビューで、メルケル首相について、「欧州を引っ張っている方で、リーダーシップを明確に示しておられ、非常に頼もしいと思っています。」と発言している。⁹⁾

(2) 民進党蓮舫代表

同じくシリーズ「日本のメルケルを探せ」というテーマのインタビューで、メルケル首相について、「ヨーロッパ全体を引っ張るといようなリーダー」と発言している。¹⁰⁾

両氏とも、メルケルがヨーロッパの強力なリーダーだとの認識である。蓮舫は、インタビューで日本の女性のおかれた状況は、女性が首相になることができたドイツとは異なり大変遅れた状況だと述べているが¹¹⁾、ドイツ人が著わした著書からするとドイツも男性社会で女性の意見が反映されることは少なかったことがわかる。¹²⁾

4. 著作物からみえるメルケル理解

ドイツ関連の著作物が多い。また、部分的にメルケルに触れているものもある。しかし、メルケルそのものを対象とし比較的包括的に論じたものは少ない。ここでは、この要求に該当すると思われる佐藤¹³⁾及び池上¹⁴⁾の著書を取り上げることとする。また、すべてを論ずることはできないので、メルケル理解にとって重要と思われる幾つかの視点に絞って検討する。メルケル理解に関わる重要な視点については、ラルフ・ボルマンの著書¹⁵⁾から多く示唆を受けた。メルケル理解に関わる視点は以下の通りである。

- ①女性の視点
- ②祖国を失った人の視点
- ③ナチスの否定の視点
- ④欧州統合推進の視点
- ⑤脱原発の視点
- ⑥連立の魔術師(プラグマティスト)の視点
- ⑦キリスト教文化の視点
- ⑧科学・技術・芸術・文化の視点

(1) 女性の視点

メルケルは、ドイツ初の女性首相であり、ヨーロッパのリーダーである。サッチャー元イギリス首相に比肩する傑出した女性という意味で「第二の鉄の女」と言われることもある。佐藤は、著書でメルケルが女性であることについて部分的に言及するが正面から取り上げていない。統一宰相コール首相の「お嬢さん」と呼ばれたとか、魔女

メルケルの「父親殺し」(コール首相の不正批判)とか、欧州でただ一人君臨する圧倒的存在、すなわち女帝となったとか、ネガティブで激しい表現が気になるところである。¹⁶⁾ 池上も、まとまって述べてはいないが、メルケルが「現代の鉄の女」と呼ばれていること、「ブレアイギリス首相がメルケルを評価した」など肯定的に紹介している。¹⁷⁾

歴史上女性の意見が政治に反映されることがほとんどなく抑圧されてきたなかでの女性の社会進出とリーダーシップの発揮は大変価値のあることと言えよう。女性には、深い慈愛と優しさ、自立を促す養育・指導力、過去を捨てまだ見ない世界に身を投じる勇気とそこで柔軟に生きていく強さなどがあることも事実であろう。

(2) 祖国を失った人の視点

メルケルは東ドイツで育ち、35歳まで東独科学アカデミーで理論物理学の研究に従事していたが、ベルリンの壁崩壊を機に東ドイツは消滅し統一ドイツとなった。佐藤、池上とも国を失ったという視点は見られず、その影響についての言及もない。国を失うことの衝撃は想像を絶するものがあるだろうし、メルケルの生き方に大きな影響を与えたことは間違いないであろう。¹⁸⁾ 一方、メルケルは、東ドイツでの抑圧から解放されて得た「自由」を喚起雀躍して謳歌した。メルケルの思想において、何ものにも拘束されない「自由」の概念が基底にある。¹⁹⁾

(3) ナチスの否定の視点

メルケルは、ナチスの蛮行を明確に否定し、歴史的責任を引き受けようとする。そして、和解と平和なヨーロッパを確立しようとしている。佐藤は、メルケルの歴史認識には触れていない。池上は、「戦争責任をいまも自覚」というタイトルで詳細に記述している。²⁰⁾

戦後ドイツの歴代の政権は、戦争責任と和解について明確な立場を取ってきた。そして、ヨーロッパで二度と戦争を起こさないためヨーロッパの統合を必要としたと理解している。メルケルもこの歴史の文脈を明確に継承していると言える。

(4) ヨーロッパ統合推進の視点

メルケルは、ヨーロッパ統合を推進する立場であ

る。特に中・東欧諸国のEU加入に関心を示してきた。佐藤は、断片的に各所で取り上げていて、EUに冷やかかたでEU拡大に否定的な論調である。²¹⁾ 池上は、ヨーロッパ統合に特に触れていないことは奇異な感じがする。ヨーロッパ統合の問題は、メルケルが目指すものが何かとも関連し、その延長線上にヨーロッパが世界で果たす役割が視野にあると考えられ、メルケル理解にとって重要である。

(5) 脱原発の視点

メルケルは、福島原発事故を教訓にして、2011年5月30日に2022年までに原子炉すべてを閉鎖することを決定した。事故から3ヶ月も経っていない中で決定であった。世論の後押しがあったにせよ、福島原発事故からメルケルが受けた衝撃の強さと素早い決断力に着目したい。²²⁾ 佐藤は、メルケルの原発政策について一切触れていない。池上は、引用文献にあるとおり、「福島事故で脱原発に」と題し詳述している。²³⁾ なお、ドイツの原子力政策の経緯については、熊谷著「なぜメルケルは「転向」したのか」が詳しい。²⁴⁾

(6) 連立の魔術師(プラグマティスト)の視点

メルケル政権は、すべて連立政権である。友党のキリスト教社会同盟との共同行動はもちろんのこと、社会民主党との大連立を2回、自由民主党との連立を1回経験している。連立が不可避なのは、ドイツ特有の選挙制度とも関連しているようだ。ラルフ・ボルマンは、「あざやかな「連立の魔術師」」として一章を割いており、その中で、連立の基底にあるメルケルの行動指針は、プラグマティズムにあるとする。さらに、第一次世界大戦前のイタリアで生まれた「変容主義」を身につけたとしている。²⁵⁾ 佐藤は、「リケジョのマキャベリスト」として一章を割き、メルケルは権力志向であり、政治イデオロギーはないとする。²⁶⁾ 池上は、大連立により、高い経済成長率を実現したことで国民の支持を得たとしている。²⁷⁾ メルケルがプラグマティストだとした場合、それをどう捉え評価するか、課題が残る。

(7) キリスト教文化の視点

メルケルは、プロテスタントの牧師の娘である。メルケルの人格や思想にキリスト教がどのように影響しているかを探ることは、メルケルを深

く理解するため意味があることである。²⁸⁾ ラルフ・ボルマンは、「プロテスタント風の慎ましい暮らしぶり」及び「ローマ教皇を批判」と題する二項目を立て詳述している。²⁹⁾ 佐藤は、メルケルを「ルーテル主義の政治家」と呼ぶ神学者の言葉を紹介し、それがメルケルの「緊縮策」への情熱と「国家の自己鍛錬」の信念に現われていると断じた。³⁰⁾ 池上は、このテーマに関する記載はないが、ブレアイギリス首相のメルケル評価の紹介をしているか所が関係しているかもしれない。³¹⁾

(8) 科学・技術・芸術・文化の視点

メルケルは、東ドイツ科学アカデミーで理論物理学を研究してきた物理学博士である。科学者である他、音楽や演劇を愛し、サッカー好きでも知られている。ボルマンは、「旧東ドイツ出身の、オペラ好きな女性物理学者」と題し一章を当てている。³²⁾ また、諸資料からすると、演説等では思想家や哲学者の言葉も多く引用している。佐藤、池上とも、物理学者、リケジョとして簡単に紹介している。科学者であることが政治手法に影響を与えているとする見解もある。また、科学技術や産業振興、人材育成・能力開発に意欲的である。³³⁾ メルケルが、ロシアの啓蒙専制君主でロシアに西洋文化を広めたエカチエリーナ2世を改革者として尊敬している点からしても、この分野のメルケル理解を深める必要がある。³⁴⁾

(著作物から見たメルケル理解の小括)

(1) 祖国の喪失(両氏)、戦争責任及び脱原発(佐藤)、ヨーロッパ統合(池上)など重要視点の中で取り上げていないものが多く見られる。また、女性、キリスト教、科学・文化などの各視点に多少触れている程度で深まりに欠けるものも多い。これらをしっかり取り上げ、理解を深められるようにする必要がある。今後、メルケル研究やメルケルが立ち向かっている政治課題に対する探求の深まりが待たれる。ヨーロッパ統合については、様々な著書が出版されておりこれらを探る必要がある。

(2) 投書や質問に見られる国民の関心と佐藤・池上両者の関心にずれがないかどうか、気になるところである。近隣諸国との和解・協調や脱原発、難民、格差問題等についてである。国民

の関心事や希求を受け止め、研究や議論に活かしていく必要がある。

III 第3章 考察

ここでは、幾つかの論点に絞って考察する。

1. 女性の視点に関して

佐藤、池上両氏と男性であることもあってか、女性の視点について簡単な紹介に留まり、ほとんど論じていない。一方、ボルマンは、ドイツ社会の内側からまたジャーナリストとして、女性首相の状況を詳しく述べている。その中で、メルケル本人がある時期から女性であることを自ら強調したとも述べている。メルケル及び小池都知事においても、一度女性が上り詰めてリーダーとなればそれが当然になると述べている。社会が変わり当然のことになっているのであればよいが、少なくとも日本では女性の視点で論ずる意義は減じていないと考える。メルケルが言うように、政治と社会に女性の意見がもっと反映される必要があると思うからである。

2. 祖国を失った人の視点に関して

国を失った経験がその人の人格、思想にどう影響しているか、失った人しかわからないかもしれない難しいテーマである。しかし、身近な喪失体験から想像したり、難民の人々の状況から推察したりする他ない。考えられることは、国を失うということは、生存・人権・生活を守ってくれる拠り所を失い、丸裸の状態にされ、きわめてリスクが高い状態になることであろう。また、精神的にもアイデンティティを失い、不安と混乱に陥るであろう。そして、新たな拠り所を見つけ、そこで定着して生活するという困難な作業が待っている。一方、その苦しみを通して、社会的弱者や移民、難民に対する理解を深めることも可能となろう。メルケルの場合は、統一ドイツ及びヨーロッパ連合に拠り所を見だし、合わせて、抑圧から解放されて得た自由に基づき政治の世界で活躍していく。

3. キリスト教文化の視点に関して

既述の内容の他、メルケル自身も講演の中で、「ヨーロッパの価値とは、人間の尊厳の理念に要約

されましよう。」「自由は、私たちの思考の中心点なのですが、責任ある自由、何かを目指す自由なのです。人権は、私たちの政治においてまことに重要な価値を持つキリスト教的人間像なのです。」と述べている。³⁵⁾メルケルが、とりわけ自由の大切さを強調するのは、東ドイツで自由を抑圧された体験からである。しかし、ヨーロッパ文化におけるキリスト教の歴史からみると、宗教改革者マルチン・ルター(Martin Luther 1483-1546)が提唱した近代的精神を表わす「キリスト者の自由」の概念を継承していると考えることができる。それは、人は何人にも従属しない自由を与えられており、その自由を隣人と社会のため行使する責任がある、とするものである。³⁶⁾

IV 第4章 まとめ

本研究に従事して、メルケルの思想と行動をどこまで理解できたかと問われれば、ほんのわずか理解できた、メルケル理解の入り口に入った、というのが実感である。これから本格的に研究を進める必要性を自覚している。以下、簡単な総括を行う。

1. メルケルはヨーロッパの歴史と遺産(精神等)を体現している

(1) メルケルはヨーロッパの歴史と遺産(精神等)を受け継ぎ自らに体現している。

具体的には、近代科学・技術の成果、キリスト教文化、自由の概念と実践、戦争の歴史と責任・償い、資本主義・産業発展、ヨーロッパ統合などである。歴史と遺産の多くの要素がメルケルの人格に統合され生きて働いているという理解の仕方が可能である。

(2) メルケル固有の側面(取り組んでいる課題)

しかし、それだけでは語り尽くせないメルケル固有の側面もある。個人的資質とメルケルが生きる時代の中で取り組んでいる課題である。メルケルの明晰な頭脳と決断力、判断力、女性として首相でありヨーロッパのリーダーであること、脱原発(地球温暖化等環境問題)の決断と取組み、巧みな政治運営(プラグマティスト)、国民の意見を聞く姿勢(これはヨーロッパの遺産でもあろうか)、難民受入れ(ヨーロッパの遺産の面がある)、

メルケルが持つヨーロッパが世界に果たす役割意識等がある。³⁷⁾

2. 日本におけるメルケル理解の特徴はなにか、課題はなにか

本研究著者も含め、メルケル理解が、全体的に概して紹介レベルの薄い内容で断片的である。また、個人の関心事からの主観的で部分的な理解に留まっている。これを打開するために、ヨーロッパの歴史的・社会的背景をもっと学び、理解を深める必要がある。さらに、メルケルという対象そのものに真向かい、ありのままに客観的に理解することを基本として、その上で日本の課題及び各人が課題と思っていることに照らして再理解するというプロセスが必要とされるのではないか。

研究をさらに進展させるためには、メルケルが活動している所で、メルケルのおかれた状況と内面に即して研究を進める必要があり、現地の言葉で数種の伝記を含む著作物やマスコミ情報を探索する必要あると感じている。後日の課題としたい。

参考文献

- 1) CiNii <http://ci.nii.ac.jp/naid/40020272487> 平成28年11月16日15:30。
- 2) CiNii <http://ci.nii.ac.jp/naid/40020272487> 平成28年11月16日16:00。
- 3) 朝日新聞、2015年03月10日、朝刊、メルケル独首相、講演全文。
- 4) 朝日新聞、2015年03月12日、朝刊、(声)メルケル首相の思い受け止めて。
- 5) 朝日新聞、2015年03月14日、朝刊、(声)歴史認識、独首相の痛烈な指摘。
- 6) 朝日新聞、2015年03月14日、朝刊、(声)和解の前提、歴史認識の深さ【大阪】
- 7) 朝日新聞、2015年12月25日、朝刊、(声)若い世代 等身大のドイツ、確かめたい。
- 8) 朝日新聞、2016年01月03日、朝刊、(声)この人に期待メルケル首相は世界の指導者に。
- 9) 毎日新聞、2016年09月08日、デジタル版、vote18インタビュー 小池百合子都知事「チャンスは待っても来ない、自分で求めていく」
- 10) 毎日新聞、2016年10月22日、デジタル版、vote18インタビュー 蓮舫代表「首相を目指す次世代につなげていく政治が必要」
- 11) 前掲毎日新聞、2016年10月22日。
- 12) ラルフ・ボルマン(Ralph Bollmann)著(村瀬民子訳): 強い国家の作り方 欧州に君臨する女帝メルケルの世界

- 戦略、ビジネス社、2014、p 7。「他のヨーロッパ諸国より時代遅れな男女観に留まったドイツという国で、女性としてメルケルが果たした役割」
- 13) 佐藤伸行：世界最強の女帝 メルケルの謎、文芸春秋、2016。
- 14) 池上彰：第2章 第二の「鉄の女」アンゲラ・メルケル、世界を動かす巨人たち〈政治家編〉集英社、2016、pp57-80。
- 15) ラルフ・ボルマン前掲書
- 16) 佐藤伸行前掲書、p10、71、81。
- 17) 池上彰前掲書、p59、61。
- 18) ラルフ・ボルマン前掲書、7p。「(強烈な自意識・不安や敏感さ・変化に対する拒否感などの西ドイツの風潮が)メルケルには、旧東ドイツ体制の崩壊に比較すれば些細なことに思われた。35歳になるまで西ドイツ国民には非常に異質な世界に生きてきたメルケルは、ある意味では自分の国にいながら移民だった。」
- 19) ラルフ・ボルマン前掲書、pp109-110。「それでも、このこと(女性が政権トップに就任したこと)は私の人生最大の驚きというわけではありません。私の人生最大の驚きとは、「自由」でした。いろいろ予想したことはありましたが、私が定年退職するまでに自由が得られるとは思っていなかったのです。(西ヨーロッパを旅行する自由を得ることができる人は、東ドイツでは、定年退職した高齢者に限られていた。金井)」
- 20) 池上前掲書、pp76-78。
- 21) 佐藤前掲書、p91。「(EUの設立、通貨統合と政治統合について)それは欧州にとって、苦悶と戸惑いに満ちた海図なき航海に他ならなかった。」
- 22) 池上前掲書、p72。「福島事故は、全世界にとって強烈な一撃でした。この事故は、私個人にとっても強い衝撃を与えました。…私は、日本ほど技術水準が高い国も、原子力のリスクを安全に制御することができないということを理解しました。」
- 23) 池上前掲書、pp70-75。
- 24) 熊谷徹：なぜメルケルは転向したのか—ドイツ原子力四十年戦争の真実、日経BP社、2012。
- 25) ラルフ・ボルマン前掲書、pp183-210。
- 26) 佐藤前掲書、pp231-246。
- 27) 池上前掲書、pp68-69。
- 28) ラルフ・ボルマン前掲書、p253。「本書は、メルケル首相の持つプロテスタントとしての信仰心と政治的信念との関わりをていねいに描き出している。」(訳者あとがき)
- 29) ラルフ・ボルマン前掲書、pp24-30、152-156。
- 30) 佐藤前掲書、pp239-240。
- 31) 池上前掲書、p61。「(メルケルが首相に就任した時の印象として)初めはなんとなくシャイでよそよそしくさえ見えたが、こちらにすぐ伝わってくるきらめきがあった。私は彼女が正直で、直感的に気心が合うと感じ…(※ブレア首相は、熱心なキリスト教徒として知られる)金井」
- 32) ラルフ・ボルマン前掲書、pp15-32。
- 33) 「技術・才能・寛容—ヨーロッパは革新により、生きるべきであり、ヨーロッパは科学技術の進歩、経済の進歩、社会の進歩により、生きるべきなのです。」pp301-302。上野喬翻訳(メルケル演説)：「ヨーロッパの魂は寛容です」ドイツ連邦共和国首相アンジェラ・メルケルのヨーロッパ議会での演説—2007年1月17日於シュトラスブルグ、東洋大学経営論集第71号 pp287-303。
- 34) 佐藤前掲書、pp181-183。
- 35) 上野喬訳：翻訳 アンジェラ・メルケル現ドイツ連邦共和国首相講演「総体的世界の中のヨーロッパの価値」、東洋大学経営論集第69号 2007 pp221-234。
- 36) 石原謙訳：キリスト者の自由、岩波文庫、1955 p13。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。キリスト者はすべての者に奉仕する僕であって、何人にも従属する。」
- 37) 「私は、民主主義、人権、自由の理想と価値を持つヨーロッパは、そこで暮らす人々や世界に対し、多くの貢献ができると、強く確信しています。」南ドイツ新聞(SZ)インタビュー書き起こし記事(2012年1月26日)、2012年3月12日、ドイツ大使館東京。http://www.tokyo.diplo.de/Vertretung/tokyo/ja/04_Pol/Rede/BK_20Merkel/20120126、メルケル首相 欧州連合(EU)について語る「ドイツの力は無限ではない」

受付日：2017年9月3日

表1 アンゲラ・メルケル年表

年	年齢	事項
1954		7月17日、当時西ドイツだったハンブルグにて誕生。父親はポーランド系の牧師。母は英語・ラテン語の教師。生後数週間で、父親の赴任に伴い家族で東ドイツに移住。
1973	19	カール・マルクス・ライプツィヒ大学に入学。物理学を専攻する。学生時代にドイツ社会主義統一党の下部組織、自由ドイツ青年団に所属。
1977	23	同じ学部のウルリッヒ・メルケルと学生結婚。(離婚。再婚後もメルケルを名乗る)
1978		科学アカデミーに就職。後の夫、ヨアヒム・ザウアーと出会う。
1986	32	理学博士号取得。
1989		11月、ベルリンの壁が崩壊。「民主主義の出発」に参加。広報担当に就任する。
1990		8月、「民主主義の出発」が東ドイツのドイツキリスト教民主同盟(CDU)と合流。 10月、東西ドイツ統一。東ドイツのCDUは、西ドイツのCDUに吸収され、メルケルも入党。12月、連邦議会選挙に立候補し当選。
1991		第4次コール政権の女性・青少年問題担当大臣に抜擢される。
1994	40	第5次コール政権で環境・自然・保護・原子力発電保安担当大臣に就任。
1998		連邦議会選挙でコール政権が敗北。コールはCDUの党首を辞任。メルケル、幹事長に就任。この年、ヨアヒムと結婚。
1999		11月、コール時代の闇献金が発覚。新聞に公開書簡を寄稿し、コールを批判。
2000	46	2月、CDUのショイブレ党首が闇献金問題で辞任。4月、メルケルが党首に就任。
2005	51	メルケル率いるCDU/CSU連合は、連邦議会選挙を僅差で勝利。大連立となり、メルケルは歴代最年少で首相に就任。
2008	54	イスラエルを訪問し、議会で演説。ユダヤ人への謝罪と反省を示す。
2009		9月、CDU/CSUは総選挙で勝利し、連立相手のドイツ社会民主党は敗北。保守派の自由民主党と連立を組み直す。
2011	57	3月、東電福島原発事故を受け3ヶ月間の原子力モラトリアムを発動。5月、2022年度までに国内の原子炉すべてを閉鎖する方針を表明。
2013	59	9月、連邦議会選挙。CDU/CSUは議席を伸ばすも過半数に届かず。ドイツ社会民主党と大連立を組む。
2015		1月、ギリシャの総選挙で「反緊縮財政」を掲げる新政権が誕生。EUに債務の減免を要求。メルケルは強硬な態度で臨む。2月、ロシアのプーチン大統領を交えてのウクライナ内戦の和平交渉を推進。停戦に持ち込む。7月、ギリシャ議会で、緊縮財政を継続する法案が可決。欧米のメディアは「メルケルの勝利」と報じる。

池上彰著「世界を動かす巨人達〈政治家編〉」巻末の年表を一部修正の上使用。